

新出の顔真卿撰書『柳惲西亭記』に用いられた 字体について

宮 崎 洋 一

On the Character Form Used in Newly Found “Liyun Xitingji 柳惲西亭記” by Yan Zhenqing 顔真卿

Yoichi Miyazaki

はじめに

2019年9月、浙江大学芸術与考古博物館が開館し、顔真卿撰書の『柳惲西亭記』¹⁾の石碑が公開された。この碑の本文は『顔魯公文集』巻13²⁾に収められており、また、『顔魯公文集』に付された南宋・留元剛編『顔魯公年譜』の大暦十二年丁巳の条に記載があって、これが石碑について記している可能性がある以外は、碑についてほとんど記録がなく³⁾、これまでその現存は、全く知られていなかった。

すでに、この碑については、薛龍春「顔真卿《梁吳興太守柳惲西亭記》読記」と碑の写真と碑陰の拓本が公刊されている⁴⁾。碑の写真と拓本は、この他にも、<https://mp.weixin.qq.com/s/-Fyw22XX7xjskCBjgB345Q>⁵⁾などのHPで見ることができる。

日本では、氣賀澤保規氏が2019年10月に実見され、同年11月30日から12月2日にかけて浙江大学で開催された「浙江大学顔真卿碑刻研究工作坊」⁶⁾や2020年1月11日に明治大学で開催された「第11回東アジア石刻研究会」などにおいて、その基本的な内容や『顔魯公文集』の本文との異同等を報告された。また、その発見状況の一端や碑の写真や拓本の一部は、『朝日新聞』デジタル版2019年12月30日（12時30分配信）でも報じられている⁷⁾。

筆者も、2019年11月に浙江大学芸術与考古博物館を訪れ、『柳惲西亭記』の石碑を実見する機会を得た⁸⁾。本稿は、同碑の基本的な内容について、薛氏と氣賀澤氏の考察に導かれながら、特に同碑の楷書の部分で用いられた字体⁹⁾について考察しようとするものである。

基本的なデータと用いられた字体について

主に前述の薛氏と氣賀澤氏の考察に拠りながら、僅かに筆者の実見の知見を加えて、『柳惲西亭記』の基本的なデータについて確認しておきたい。

『柳惲西亭記』の碑石は、もとは高さ 270 cm 以上あったのではないかとされるが、現在は、上半分ほどしか残っていない。またその残った主な部分も、碑陽の文頭から第10行のあたりで左右に、また碑陰も文頭から第19行あたりで左右二つに割れていて、展示からは確認できないが、主な碑石の全体が、縦に割れていたのかもしれない。それとは別に、碑陽の第11～12行第12～14字と碑陰の第18～19行13～15字部分がかかれた小さな碑石が残っている¹⁰⁾。それらを合わせて、もとの碑の形のようにして、黒の台座の上に、高さがおおよそ 220 cm ほどになるように復元されている（別に拓本が展示されていたが、前述の碑陽と碑陰の小さな残石の拓本はなかった）。碑の横幅はおおよそ 118 cm、奥行きはおおよそ 36 cm、字の大きさは、高さがおおよそ 7～8 cm である。

碑文は、一つのつながった文章を、4面に巡るように刻している。碑陽12行（第1行から第12行）、碑側A面¹¹⁾3行（第13行から第15行）、碑陰12行（第16行から第27行）、碑側B面3行（第28行から第30行）の計30行で、碑側B面第3行（第30行）は現存する字は見えないが、『顔魯公文集』所収の本文が碑側B面第2行の部分までで終わっているので、第3行にもともと字があったかどうかは不明である。1行は24字で揃えられていたと思われる。さらに、本稿での検討と関連するのは、文字の残存状況である。碑陽の前半、第10行までは全体に文字が摩滅して見えにくくなっているが、碑陽の第11行以降、および碑側A面・碑陰・碑側B面の文字は、はっきりと残っている。

筆者は、これまで顔真卿が楷書で用いた字体について、飯島太千雄氏の業績¹²⁾に拠りながら、いくつかの小論を発表してきた¹³⁾。本稿でも、飯島氏が用いた検討の方法と、顔真卿の楷書の「蚕頭燕尾」などの特徴は、後人の加刻によるもので、『麻姑仙壇記大字本』『李玄靖碑』『顔氏家廟碑』は本来の書風が残っていない作品、『竹山聯句』『太子少師告』は仮託の作品、とする結論とを踏襲しながら、この『柳惲西亭記』に残る文字の字体について

- A 飯島氏が本来の姿が残っていないとした作品などと同じ字体を用いており、顔真卿の作品としては問題のある文字。
- B 字体としては問題はないが、顔真卿の書としては疑問を残す文字。
- C 唐代の遺例とも、現行の活字体とも異なるが、顔真卿の字体とは一致する文字。
- D 顔真卿の字体および唐代の遺例の字体とは一致するが、現行の字体とは異なる文字。

E 唐代の遺例は少ないが、顔真卿の字体および現行の活字体と同じ字体である文字。

に分けて残っている全ての文字を考察し、特にAはすべての字について記述する。碑石には文字の一部分しか残っていないものも多くあるが、そうした文字については、『顔魯公文集』の文字と顔真卿が他の碑で用いていた字体の法則に拠りながら、筆者が推測しながら検討した。検討した文字の総数は246字である。

顔真卿の他の碑の用例は飯島太千雄編『顔真卿大字典』¹⁴⁾ 所載の文字に、また唐代の遺例は伏見冲敬編『書道大字典』¹⁵⁾・郭瑞ほか編『漢魏六朝隋唐五代字形表』¹⁶⁾ 所載の文字による。また文字の位置は、碑陽から碑側B面までの通した行数と上からの字数(第○行第△字)を「○-△」で示す。

A 『柳惲西亭記』での字体が、飯島氏が本来の姿が残っていないとした作品などと同じ字体を用いており、顔真卿の作品としては問題のある文字。

「美」(15-5)

顔真卿の他の多くの作品は上部を「𠂔」とするが、『柳惲西亭記』は上部を「𠂔」にし、『麻姑仙壇記大字本』『顔氏家廟碑』と同じ字体で書いている。

「善」(25-6)

顔真卿の他の多くの作品および『干祿字書』は上部を「𠂔」とするが、前述の「美」と同様、『柳惲西亭記』は上部を「𠂔」にし、『顔氏家廟碑』と同じ字体で書いている。

「魯」(26-6)

顔真卿の多くの作品および『干祿字書』は、下部を「日」にするが、『柳惲西亭記』は「白」にし、『李玄靖碑』『顔氏家廟碑』『自書告身』と同じ字体で書いている。

「備」(28-9)

顔真卿の作品の用例および『干祿字書』の体とは異なり、『柳惲西亭記』は旁を「苟」とし、『李玄靖碑』と同じ字体で書いている。

「𠂔」(7-7・11-2)

顔真卿は、本来、下部を「天」としていたと思われるが、『柳惲西亭記』は現在の活字体と同じ「𠂔」とし、『麻姑仙壇記大字本』『李玄靖碑』『顔氏家廟碑』と同じ字体で書いている。

「𠂔」(15-7・19-5・23-4・24-8)

顔真卿は、下部を「天」または「夫」としていたと思われるが、『柳惲西亭記』の4字のうち、下部が見える2字(15-7・23-4)は現在の活字体と同じ「𠂔」とし、『李玄靖碑』と同じ字体で書いている。

「豈」(15-6・26-12)

顔真卿には、上部の「山」の縦画を右に傾けるものはあるが、『柳惲西亭記』は2字とも横画まで右下がりにしており、『麻姑仙壇記大字本』『顔氏家廟碑』と同じ字体で書いている。

「嘗」(11-13)

顔真卿は「尚」の下部に「甘」と書いていたと思われるが、『柳惲西亭記』は、『顔氏家廟碑』や現行の活字体と同じ下部を「旨」の字体で書いている。

「與」(11-14)

顔真卿は中央の「与」の最終画を「丨」に書いていたと思われるが、『柳惲西亭記』は、一部しか残存していないが、『麻姑仙壇記大字本』『顔氏家廟碑』と同じように「一」に書いている。

「願」(24-4)

顔真卿と遺例の多くは、現行の活字体とは異なって、左の旁を「𠂔」とする。『柳惲西亭記』は上部の「ソ」が「フ」になっており、『李玄靖碑』と一致するが、下部は顔真卿の他の碑と同じ「貝」を書いている。

B 『柳惲西亭記』での字体が、字体としては問題はないが、顔真卿の書としては疑問を残す文字。

「歸」(26-3)

『柳惲西亭記』の字体は、基本的な点画は他の顔真卿の作品と同じだが、最終画の縦画が上の「ヨ」の中にまで突き出しているものはない。刻したときの誤まりの可能性もあるが、右下の「冫」「巾」が離れすぎ、字としてのバランスも悪い。

「薦」(22-4)

現在の活字体とは異なり、唐代の遺例と同様に、顔真卿は下部を「𠂔」とする。『柳惲西亭記』の字体は肝心の「冫」のノ部が見えないが、上部のくさかんむりのバランスなど、字がやや拙劣である。

「辟」(22-3)

現行の活字体を異なり、『柳惲西亭記』の字体は、顔真卿の他の作品や他の唐代の遺例で用られている「辛」の下部の横画が2本の字体だが、左の「尸」と「口」が上下に離れすぎていて、字としてのバランスが悪い。

C 『柳惲西亭記』での字体が、唐代の遺例とも、現行の活字体とも異なるが、顔真卿の字体とは一致する文字。

修(1-9・14-6)、留(24-5)、屢(24-7。數樓を含めて検討した)

この例は、顔真卿が唐代の遺例とは違う字体を用いていたことを示しており、この字体が『柳惲西亭記』に用いられていることは、『柳惲西亭記』がまさし

く顔真卿の書であることを示す。

- D 『柳惲西亭記』の字体が、顔真卿の字体および唐代の遺例の字体とは一致するが、現行の字体とは異なる文字。

烏 (1-3・4-3), 縣 (1-5・4-5), 韻 (12-1), 過 (28-2), 壞 (13-5), 今 (23-5), 卿 (3-1・24-10), 頃 (17-6), 罌 (6-6。瓜を含めて検討した), 後 (19-13), 候 (18-5), 刻 (18-2), 再 (10-9・21-3), 宰 (14-1), 紫 (2-2), 稱 (19-15・23-1), 亭 (4-8・12-7), 敦 (18-13), 餘 (19-2・27-6), 柳 (7-6・10-5), 列 (21-2)

これらの例は、『柳惲西亭記』がまさしく唐代に書かれたものであることをよく示している。

- E 『柳惲西亭記』の字体が、唐代の遺例は少ないが、顔真卿の字体および現行の活字体と同じ字体である文字。

爲 (8-8・11-8・18-1・23-11), 於 (20-5・21-11), 舊 (23-3), 經 (18-15), 興 (7-8・11-3), 此 (12-6・28-5), 所 (22-2・26-2), 將 (13-4), 旌 (25-3), 摠 (5-5), 廚 (18-7), 佞 (25-11), 曆 (29-1)

字体が唐代の用例とは異なっていながら、『柳惲西亭記』がこの字体を用いていることは、Cと同様、『柳惲西亭記』が顔真卿の書であることを示している。

ただ、拙稿でも指摘したとおり、後人の加刻の可能性もある。

Aの15例が顔真卿の楷書の字体とは一致せず、この『柳惲西亭記』の字体に疑問がある。またBの3例は書としての良さについて疑問がある。しかし、それ以外の大多数の文字は、いずれも顔真卿の楷書の字体と一致している。

おわりに

Aの15例は、今回検討した246字のうちの6.1%で、書の美しさに疑問のある文字を含めても、『柳惲西亭記』は顔真卿の書として大きな問題ないと考えられる。ただ、これらの字が、どのようにして混じたのかは、後人の加刻など可能性を含めて今後考えてゆく必要があるだろう。そして、その材料として考慮しなければならないのは、AとBの文字が書かれた文字の位置である。

前述のように、この『柳惲西亭記』の碑面は、碑陽の前半第10行までとそれ以降(第11行以降)とが大きく異なっており、第10行までは摩滅が激しく文字も細くなっている。しかし、碑陰が割れ目の左右で平坦に揃えられて復元されているにも関わらず、碑陽の前半部分が後半部分より凹んでいるとは確認できなかった。碑陽の後半の文字は深くははっきりと碑面に刻されているので、もともとこれと同じ状態だった碑陽の前半の碑面が摩滅して、現在のような文字がはっきりしない状態になったとは簡単には考えられない。

また、本稿で検討した文字のうち、碑陽の前半の摩滅の激しい文字は69字（28.0%）、それ以降の部分は177字（72.0%）であるが、問題のあるAとBの18字のうち、摩滅の激しい部分の文字は下線を付した「呉（7-7）」1字しかない。これは問題のある全18字のうちの5.6%にしかならず、問題のある文字は、文字のはっきり見える部分に多い。

筆者は、前掲の拙稿において、『殷夫人顔君碑』が顔真卿の本来の姿を残す史料であることを指摘しているが、『柳惲西亭記』と『殷夫人顔君碑』がよく似ていることが指摘されていることを考え合わせると、この碑陽の前半部分に対する評価には、さらに細かな検討が必要であると考ええる。

注

- 1) 羅哲氏は、http://blog.sina.com.cn/s/blog_15dfa23600102z2kz.html（2019年9月9日配信。2020年1月26日23時12分閲覧）において、題名を「修梁吳興太守柳文暢西亭記」とする。
- 2) 『四部叢刊』所収の明嘉靖2年（1523年）錫山安国安氏館刻本。
- 3) 知られている史料は、清・黄本驥編纂『顔魯公文集』巻28「書評」8に引用された『湖録』のみ。
- 4) 『浙江大学艺术与考古博物館年鑑（2018）』上海書画出版社，2019年9月。薛氏の論文はpp. 8～15、碑の拓本と写真は、pp. 100～105。
- 5) 2019年9月8日配信。2019年10月16日2時14分閲覧。
- 6) このシンポジウムの内容は、氣賀澤氏から直接ご教示いただいた。記して深く謝意を表す。
- 7) 紙面では、『朝日新聞』2020年1月11日大阪本社版夕刊・西部本社版夕刊（ともに7面）に掲載された。
- 8) 筆者は、11月に実見する前に、『書法報』2019年9月18日（総1784期）の記事や前掲のHPに拠って、碑の公開について紹介した（「顔真卿書『柳惲西亭記』残碑について」『書論』第45号、書論研究会，2019年11月，p. 247）。
- 9) これ以外に、碑陽と碑陰の上部に篆書の題、本文末尾に「大曆十三年・・・」の隸書の款記があるが、本稿の考察では除外する。
- 10) この碑陽と碑陰の小さな残石は、現在の展示からは確認できないが、それぞれの残存部分の文字の位置や、下記のHP <https://artouch.com/people/content-5606.html>（作者鄭又嘉。2018年12月24日配信，2020年1月26日15時02分閲覧）の写真からすると、つながった1つの石の表裏の可能性はある。
- 11) 文章の前半部分が刻された面を碑側A面、末尾部分が刻された面を碑側B面とする薛氏の呼び方に従う。

- 12) 飯島太千雄 「試論－顔書の実像」, 飯島太千雄編 『顔真卿大字典』東京美術, pp. 1301-1423. なお, この飯島氏の業績については, 拙稿「顔真卿の書の再検討－飯島太千雄氏の指摘を承けて－」『中国－社会と文化』5, pp. 226-245, 参照。
- 13) 「顔真卿書『殷夫人顔君碑』について－顔真卿の晩年の書風に関する一考察－」(『書学書道史研究』創刊号, 1991年6月, pp. 68～82)・「顔真卿撰書『郭虚己墓誌銘』に用いられた字体について」(『書論』第34号, 2005年4月, pp. 92～99) など。
- 14) 東京書籍, 1985年。
- 15) 角川書店, 1974年。
- 16) 臧克和主编 『中国石刻叢書』, 南方日報出版社, 2011年。